

京都・田中部落の改善運動と上田静一

朝 治 武

はじめに

近代日本社会の部落改善運動や長年にわたって推進されてきた同和行政における改善事業などで課題となってきた部落改善もしくは改善というのは、部落問題において如何なる意味を持ちうるのだろうか。今日的段階における同和行政の改善に対する理解は、部落の劣悪な生活状況が部落差別の結果として存在し、この劣悪な生活状況を改善することが部落解放のためには必要であり、その推進については地方行政や国など政治に責任があるとされてきた。このように改善を含む同和行政は高く評価されてきたが、従来から部落改善運動における改善は部落および部落民衆に部落差別の責任を求め、またその改善も不徹底であるとして否定的に捉えられてきた。しか

し改善の内容からすると部落改善運動の改善と同和行政の改善は明らかに連続している側面があるだけに、その二つの改善の目的や位置づけ、責任の所在などについての評価の相違は必ずしも事実をふまえた整合性あるものとはいえない。このような現実的な問題意識を念頭におきながら本稿で説明しようとするのは、表題の通り京都・田中部落の改善運動と上田静一の関係である。すでに上田を中心とした田中部落の親友夜学校については白石正明氏の詳細な研究⁽¹⁾があり、また上田が推進した北海道移住についても白石氏の先駆的な研究⁽²⁾が存在する。しかし白石氏の研究は史料制約もあつてか親友夜学校と北海道移住に絞られたものであり、いまだ田中部落の改善運動については本格的に検討されていない。

田中部落の改善運動を検討するにあたって、その論点を明確にするために部落改善運動史研究を整理しておく必要がある。まず部

落改善運動についての最大公約数的な輪郭は、藤野豊氏によって次のように概括されている。⁽³⁾第一に部落改善運動の成立については「松方デフレや産業革命を経験するなかで、被差別部落の貧困が鮮明になり、差別の原因をそうした部落の環境の劣悪さや貧困、不就学に求める認識が部落の内外に生まれ」、「したがって、差別を解消するには、環境改善・生活改善が必要とされ、ここに部落内部から部落改善運動が起こる」とされた。第二に部落改善運動の性格については「部落改善運動は、部落大衆の自発的な運動からしだいに県当局の統制下の部落改善事業へと変質させられ、地方改良運動の一環にも位置づけられていった」とされた。第三に部落改善運動が部落および部落民衆に齎した影響については、「部落改善運動は、差別の原因を部落側に求めるため、改善の効果が上がらなければ、それは部落大衆の怠慢とされ、かえって差別を肯定する結果となった」とされた。第四に部落改善運動の行方については、「一九一〇年代には、部落改善とともに一般社会にも差別意識の一掃を求める融和運動が勃興していくことになる」とされた。この藤野氏の概括は、全国的な部落改善運動の傾向について指摘したものとしては妥当なものといえよう。

ただ概括であるだけに、より具体的な論点の整理という意味では十分なものとはいえない。そこで主要な部落改善運動史研究⁽⁴⁾から、いくつかの論点を析出していこう。第一は、部落改善運動と先行する部落の動向との関係である。とくに部落改善運動は自由民権運動

の挫折のうえに成立したとするだけに、二つの運動の関係は重要であろう。第二は、部落改善運動の性格ついてである。いわば部落改善運動は近代日本社会成立に対応した近代的性格をもつのか、また前近代的な性格をもつものかどうかということである。第三は、部落改善運動の主要な担い手と部落民衆との関係である。担い手に着目するだけでなく、部落民衆との関係を整理することは部落改善運動の地域的基盤と影響力を探るうえで検討にとつて必要不可欠であろう。第四は、部落改善運動を部落および地域社会に位置づけることである。とくに部落改善団体が部落内において自治組織の一つとして機能して府県や市町村と関係を結んでいたこと、また時として部落民衆に対して支配団体の役割を果たしていたことの意味は重要であろう。第五は、日露戦後に展開された政府主導の地方改良運動と部落改善運動の関係についてである。地方改良運動の位置づけについては評価が分かれているが、ここに地方改良運動一般に解消されない部落改善運動の独自の役割の析出が可能であるからである。第六は、部落改善運動と政府および府県、市町村など行政との関係についてである。このことは従来から部落改善運動が官製的か自主的かという問題に一定の見通しをつけ、部落改善事業との距離を計ることに繋がるであろう。第七は、部落改善運動と融和運動・水平運動との継承関係についてである。すなわち一つは部落改善運動は融和の論理を内包していたが融和運動に転化したかどうかであり、もう一つは従来から部落改善運動を否定して水平運動が成立したと

評価されてきたが、断絶している側面を指摘しながらも如何なる側面において連続しているかということである。つまり総じて部落改善運動については問題点を抱えて水平運動によって克服されるべき否定的な運動としてではなく、部落民衆が参加した部落差別撤廃もしくは部落解放運動の一形態として独自の存在意義を明らかにしていかうとするものであるといえよう。⁽⁵⁾

このような論点をふまえながら、本稿では主として対象とする時期を一九〇六年から一九一六年に限定しながら次のような具体的な課題を設定したい。第一は、田中部落における改善運動の具体像を明らかにすることである。これまで田中部落の改善運動については断片的には検討されてきたが⁽⁶⁾史料的に十分なものはなく、上田静一資料を基本としながらより詳細な事実を明らかにしたい。第二は、部落改善運動において田中部落内で自治的役割をも果たすことになった改善団体と青年会の内容を検討することである。第三は、田中部落の改善運動における上田の役割を確定することである。第四は、水平運動と融和運動との継承関係について一定の見通しをつけることである。そして田中部落の改善運動を検討するにあたって、次の点に留意したい。第一は、できるかぎり田中部落の生活状況や内部構造を踏まえることである。第二は、田中部落だけでなく地方行政としての田中村をはじめ愛宕郡、京都府との関係をふまえることである。第三は、部落改善運動が部落民衆にもたらした影響を重視することである。第四は、近隣に位置する柳原町の部落改善運動や中

央融和団体である帝国公道会などと関連づけることである。なお以下では行政村の田中村に対して、被差別部落としての呼称については田中部落と呼ぶことにする。

一 上田静一の部落改善構想

上田静一は一九〇六年三月に京都府師範学校を卒業して四月には田中尋常小学校に赴任し、十一月には田中部落内に親友夜学校を開設した。⁽⁷⁾上田が田中部落において改善を思い立ったのは、この親友夜学校を開設したばかりの一九〇六年十一月であった。つまり上田は親友夜学校の開設を教育という枠だけでなく、田中部落の改善の第一歩として位置づけていたのである。この時から翌年である一九〇七年の九月にかけて、上田は「田中村経営二就き思ひ出するま、記入す」⁽⁸⁾という記録をつけた。「田中村経営」という表現を使っているが、具体的には田中部落の改善を指すものであった。一九〇六年一二月には、「二、現仮校舎全部床ヲ張ル事（後日実行セリ）」「一、村内空土地ニ樹木ヲ植ユル事」「一、村内ノ中央ニ清水ノ流ル、溝ヲ作ル事」と記されている。第一項の親友夜学校については実行に移されているが、第二・三項については部落内の合意と軽費の問題から直ぐには実行できないものであった。

年が明けた一九〇七年一月には、「一、学科中唱歌科ヲ設ケ俗歌ヲ減ズル事（直ニ実行ス）」「一、修身科は伝記物を加へて（偉人伝）


興味ヲ引ク事／一、夜間路外出で明光月ヲ踏ンデ勇氣ヲ養ふ事（実行セリ明光大字文山ニ登ル、暗夜明神森ニ至リ一人一人の肝をためす）」という項目が挙げられた。これらはいずれもが親友夜学校に關するもので、部落の子どもを社会に通用する立派な人間に育成しようとするものであった。三月には、「一、夏季モ夜学ヲヤリテ青年の教育ヲ盛ンセント思ヘリ（実行ス）／一、婦人部、少女、既婚者、老年者の統一法ナキカト考ヘタリ／一、既婚者婦人、既婚者男子、及び老年の統一法ニハ両寺院法事ニ行キテ談話演説ヲナス事ヲ思ヒツク（直ニ実行セリ）」という項目が記された。上田は親友夜学校だけでなく青年層の教育にも強い関心を示し、また部落内の各層に対しても改善の方法を模索しようとしたのであった。そして解決の一方法として、寺院と連携して「談話演説」を実行したのであった。

四月になると、「一、少女（子守）小児の悪戯ヲ防グ法及間食ヲ防グ法／一、青年男子ノ悪戯間食ヲ防グ法／一、右予防法一村の公園設置ヲ思ヒ付ク／一、右之為運動場設置ヲ思ヒ就ク（後実行セリ）」という項目が挙げられた。子どもと青年の悪戯と間食が人格形成にとって障害物となっているとの認識が示され、その予防のために公園や運動場が重視されたのであった。すなわち親友夜学校では教育といつても、勉強だけでなく社会に通用する生活態度の改変が目指されたのであった。五月になると、「一、少年団ヲ組織シ廢物利用ヲ実行シテ少年ノ手ニヨリ何か公共的事業ヲナサシムル事／一、青

年団ヲ組織シ何か事業ヲ起シテ公共利益ヲ計ル事（後日実行セリ）／一、少女団ヲ組織シ何か事業ヲ起シ公共利益ヲ計ル事／一、少女裁縫を設くる事（日曜は午後と定め実行セリ）」という組織化のための提案が示されることになった。この段階では少年団や青年団、少女団の組織化と少女裁縫を思い立ち、後に青年団と少女裁縫については実行に移されたのであった。とくに強調されたのは、「公共的事業」や「公共利益」などの社会的な役割であった。

六月になると、「一、仏教、大学生利用法／一、青年男女以下の娯樂を教育的ならしむる為、図書室ヲ開キ雑誌、図書類等見せん事を思ひつく（後実行セリ）」という項目が記された。第一項の意味は不明であるが、青年や子どもについては娯樂を教育的なものにするために、親友夜学校内に図書室を設置したのであった。九月になると、「一、少年貯金法ヲ思ヒ就ク／紡績会社行きのものは月給の五分の一／一、労働者青年は休日其の日余暇ヲ利用して金儲け其れを貯金する事／一、夜学生散髪を思ひ就ク（後日実行す）」という項目が加えられた。他の部落改善と同様に生活のために貯蓄が重視されたが、これは一方で余暇の悪戯を予防するための人格形成にとって重要なものとして位置づけられていたのであった。ただ実行については子どもや青年自身の生活態度の激変を伴うため、この段階で実行については用意ではなかったと思われる。

そして記述の最後となる九月には、より具体的な「一、貧家幼稚園を組織シ父兄（両親）の労働を防ゲザリシムル事、及び善良なる

少年ニする事／一、青年相立て散髪をしあい共同貯金をなし夜学の費用を助くる事（十一月末より実行セリ）／一、就業後退校者ニ校訓ノ貴きものや与ふ事、以て生涯の反省ニスル事／細民ニ無料医師を村内ニ置く事／別問題／一、会社男女工月二回居残料を集めて公共的経営ニ宛ツる事／一、生活区域分担せしむる事、青年生活ニ督促する事／一、生徒ニ通知一済を渡す事／細民児童の義務教法／夜学にてやること／一、校名 誠徳 親友夜学校／一、校訓 誠徳歌／一、校歌 誠の歌／一、徽章 ／一、風呂場ニ小塗板

をかける事／一、道路の暗き所ニ瓦斯燈を立つること／一、共同便所を多く設けること」という項目が挙げられた。第一項のように貧困家庭に対しては両親の労働のためと教育的配慮から幼稚園の設置を提案したが、田中村当局からの資金的援助が必要であったため、実現できなかったと思われる。第二項では青年に対して散髪によって共同貯金を提案し、これは自主的なものであったため実現している。また第三項では規律を重視し、第五項のように部落内の生活については青年の役割に期待しものであった。このように上田の提案は親友夜学校の活動を基礎におきながら部落内の生活般の改善を射程に入れたものであり、とりわけ青年層の組織化によって社会の公共的活動を推進しながら人格を形成していこうとするものであった。親友夜学校に関することは上田を中心に独自の判断から即座に実行に移され、田中部落全体の合意や田中村当局の資金的援助によるものは徐々に実行に移されていった。しかし、いくつかのものについて

では、実現できなかったものと思われる。とはいえ、この上田による部落改善構想は田中部落における改善運動の基礎となり、後に述べるように徐々に具体化の方向に進んでいったのである。

二 田中部落の生活状況

上田が田中部落の改善に乗り出した背景には、上田が問題とする田中部落の生活状況があった。断片的な史料から、できるかぎり具体的に田中部落の生活状況を析出していこう。田中村は京都府愛宕郡の一五の村の一つであり、京都市に隣接していた。一九一一年現在、愛宕郡の戸数と人口は五六一一戸、三四九五〇人であり、田中村の戸数と人口は七〇九戸、四三二〇人であった。⁽⁹⁾土地が肥沃で米作とともに茄子や胡瓜などの野菜の栽培も盛んであったが、京都市と隣接していたため、工業や商業に携わるものも多かった。このような田中村のなかに、田中部落が存在していたのである。

一八八六年の京都府勧業課による調査⁽¹⁰⁾によると、田中部落の人口と戸数は一五八戸、八八一人であった。また田中部落の職業構成を記載順に見ると、農業の六戸をはじめ雪駄下駄小道具質商が二戸、西洋靴商が三戸、湯屋が二戸、太鼓商が一戸、精肉商が二戸、青物商が二戸、乾物商が一戸、履物直シが一四戸、人力車曳が一四戸、西洋靴仕立が六戸、女性戸主で日稼が四戸であった。履物直シが一四戸と約七割を越え、人力車曳は約一割の一四戸であった。履物

直シをはじめ雪駄下駄小道具質商、西洋靴商、太鼓商、西洋靴仕立などは、近世以来の部落の仕事を引き継いだものであった。また女性の戸主で日稼ぎの者が、四戸あった。一五八戸のうち約四割に当たる六〇戸は、「生活ニ差支ナキ者」とされ、また「職業不景氣ニシテ目下生活ニ困迫スルモノ九拾八戸、内四拾戸ハ糊口致シ兼候困窮者」、すなわち約六割が生活に困っていて、しかもそのうち約四割が食ふことさえできない生活困窮者と認識されていたのであった。つまり一八八六年の時点で、すでに田中部落は全体として貧困な状況に陥っていたのである。

一九〇二年では田中部落の戸数と人口は二一四戸と一二九四人であり、「元穢多ト称スルメ部落ニシテ重ニ履物直シ及ビ人力車夫又小行商ニ従フ」と記された⁽¹¹⁾。翌年の一九〇三年の調査では、愛宕郡野口村内の部落と合計であった⁽¹²⁾。これによると職業は「履物直シ、土方、車夫、雑商」とされ、生活は「一人一日ノ収入平均凡式拾銭内外ニシテ支出モ又全シ、収入ノ点ヨリ見レハ相当生活シ得ラル、モ彼等ノ習慣トシテ徒ニ飲食ヲ以テ殆ント其日ノ最快樂トナスヲ以テ部落中四五ノ者ヲ除ク外ハ大抵ハ細民ナリ」と貧困な状況が記された。また「田中村ハ嘗テ犯罪者ノ出タルコトナシ人情ハ寧口溫柔ナリ」と記され、また「田中村ニ於テ多少ノ貯金者アリ」として後にも述べる早瀬圓藏が挙げられた。

そして一九〇八年には田中部落の戸数は約二〇〇戸となり、うち数人は一万円以上の資産を有していたが、「大部分は何れも青物行

商、土方、人力車夫、土砂採集、及運搬等の労働者に属して言は、その日暮らしの有様」と報じられるほど貧困な状況であった⁽¹³⁾。一九一三年頃には田中部落は戸数は二二九戸、人口は一二六五人であり、「履物業ヲ主トシ商業ヲ営者アリ」と捉えられていた⁽¹⁴⁾。一九一一年には、田中部落は次のように報じられた⁽¹⁵⁾。すなわち「租税徴収に一方ならぬ困難を極める所」と評され、「中には少数の金持ちもあるが大多数は惨憺たる生活を営んでいる」が、「貯蓄の觀念が皆無で食ふことを唯一の娯楽として居る連中」と貧困の原因を職業のあり方に求めず差別的に田中部落の生活態度に求めたのであった。

このような状況の中で、一九一〇年三月二六日の田中村議会において田中部落の納税について議論された⁽¹⁶⁾。田中部落では戸別割税の滞納者が多く、税総額七〇〇円のうち三〇〇円以上が欠損であった。そこで田中部落では湯屋の利益金から欠損額を越える四八〇円を税に充てることを村議会に要請し、これが村議会で認められたのであった。また年は下るが、一九一四年二月二日の村会議でも税について議論された⁽¹⁷⁾。そこでは田中村における全の滞納者の約九割が田中部落の貧困者であることが明かされ、納税を翌年度に延期することが決定された。つまり田中部落は極度の貧困に喘いでいたのであり、それは村財政を危機に陥れかねない税の滞納に繋がっていっただけに、村当局と村議会では座視できない問題として認識されていたのであった⁽¹⁸⁾。

このような田中部落の貧困な状況を、上田も十分に認識していた。

上田自身も、親友夜学校を始めてから田中部落の職業調査をおこなった。⁽¹⁹⁾その調査結果の職業を戸数別に記載順に沿って見ると僧侶の二戸をはじめ教員が一戸、通勤が八戸、青物商が一九戸、日稼が一二戸、商業が四八戸、工業が二三戸、湯屋が二戸、魚商が一戸、無職が四戸、隠居が二戸、質屋が四戸、理髪が一戸、土木が九戸、農業が二戸、飲食店が一戸人の全体では三三九戸とあった。⁽²⁰⁾日稼は最も多く約六割の二二二戸が日稼であり、日稼で最も多かったのは、後に述べるように人力車夫であったと思われる。そして商業、工業、土木、通勤と続いた。なお田中部落の女性については、近くに存在する鐘紡京都工場に勤める者もあった。⁽²¹⁾また「家持」が約三〇戸、「普通」が一九八戸、「最貧民」が一戸とも記された。つまり約九割が借家であり、約三割が生活困窮者と認識されたのであった。また上田は、「貧富調査簿」⁽²²⁾をも作成した。親友夜学校に通う一四五人の児童について保護者と生活程度を記したものであった。生活程度は一等から五等までと等外の六つに別けられた。それぞれ一等は「自家所有、普通ノ商業ヲ営ミ如何ナル場合モ生活難ナキモノ以上トス」、二等は「借屋ニ住ムモ商業又ハ工業等ヲ営ミ三、四ヶ月働カズトモ生活難ナキモノ」、三等は「別ニ災難ナケレバ十日ヤ二十日働カズトモ生活難ナキモノ」、四等は「三日と働カザレバ直ニ借金生ジ又金融セザレバ生活デキザルモノ」、五等は「フトン借り質屋通ひナレド一日働カザレバ直ニコマルモノ」、等外は「人のナサケヨリ漸ク露命保ツモノ」と規定された。そして一等は

四人、二等は九人、三等は三八人、四等は七十七人、五等は一七人、等外はなかった。つまり一等と二等の生活難でない者は少なく、四等が最も多く約半数を占めたのであった。また親友夜学校に通う青年では一等と二等、等外はなく、三等が八人、四等が二十七人、五等が二人と、ほぼ児童と同じ傾向であった。親友夜学校に通っているということから貧困者が多かったのは事実であるが、その貧困は極めて厳しい状況にあった。つまり上田の日から見ても、田中部落は貧困そのものであったのである。

とくに上田は親友夜学校に力を注いでいた関係から、田中部落の子どもの状況については憂慮の念を示していた。一九一五年一二月二六日に上田が執筆して京都府視学の西原光太郎に提出した「私立親友夜学校設立認可申請意見書」⁽²³⁾には、田中部落の子どもの状況が具体的に記された。そこでは子どもが就学できない理由が、次のように記された。まず第一は、「保護者貧窮ニシテ児童相当年齢（約十歳）ニ達スレバ労役ニ従事セシメテ収入ノ道ヲ計リ又家事手伝子守等ヲナサシメ保護者労働ノ便ヲ計リ以テ一家ノ生計ヲ立ツルコト」という貧困ゆえの労働に従事しなければならないことであった。第二は、「細民部落ノ常トシテ早婚離婚再縁再々縁ノ弊風甚タシク従ツテ戸籍上ニテモ実際上ニテモ保護者トノ統柄複雑ナル子女ノ数多ク貧家トシテ之レ等多数ノ子女全部昼間就学セシムルコトハ到底行キ得ラレザル事実ナルコト」という婚姻関係から生じる問題であった。第三は、「早熟早婚ノ結果学齡中事実上ノ婚姻スルモノアリ出

産届ノ遅延スルモノアリ随ツテ学齡始期ハ事実上ノ満六歳ニアラズ学齡期尋常小学校六年卒業期は既二一六、七歳ニ達スルモノアリ此レ児童ハ又尋常六年卒業マデ昼間就学之不能者ナリ」と出産届の遅延による学齡時期の遅れであった。第四は、「旧来ノ因習上諸種ノ元因ニヨリ又昼間就学之不能者アリ」という旧来から学校に行かないという悪習慣であった。ここに述べられたのは、児童労働や婚姻関係、行政上の手続き不備、長年にわたる悪習慣などであった。これらは、貧困と密接に関係していたのである。しかし上田は貧困をはじめとした田中部落の生活状況については的確に把握していたものの、その貧困な生活状況を齎らす社会の田中部落に対する差別的な対応や眼差しについて述べることは全くなかった。すなわち上田には部落の生活状況を部落差別の結果として捉える視点は、全く存在していなかったのである。このような視点と認識から、上田は親友夜学校を軸とした部落改善に力を注いでいったのである。

三 部落改善団体としての自彊会

田中部落における改善運動の本格化は、一九〇八年一二月の自彊会に始まる。しかし部落改善の動きは、一九〇八年七月に始まっていた。下鴨警察署は上田を中心におこなわれていた親友夜学校の調査に乗り出し、田中部落について「柳原町矯風会に倣ひ将来部落人民の勤儉貯蓄其他良風俗の奨励を為し積弊を匡正せんとする計画も

あるよし」と報道された⁽²⁴⁾。田中部落の改善運動に大きな影響を与えた柳原町矯風会は七条警察署塩小路署署長の吉村盈に指導され、七月一五日に設立された部落改善団体であった⁽²⁵⁾。また田中部落に対しては愛宕郡長や警察署長らが改善のために「専ら善行を奨励」していたが、とくに上田は「最も熱中の余り此の程部落に居住し、自ら部落の人となつて実行に努めるのは人の勧賞して居る所である」とも報じられた⁽²⁶⁾。この記述は具体的には、上田が中心となつて設立された親友夜学校の示すものであった。

当時、田中部落では講を組織することが盛んであった。講とは講主が中心となつて会員から金を集め、その利益を会員に配当するというものであった。田中部落では数十にも上る講が組織され、多くの会員を擁していたのである。いわば講は庶民金融ともいえるもので、部落民衆の生活にとつて密接な関係をもっていたのである⁽²⁷⁾。この講から齎される利益の一部を割いて、部落改善に充てられることになった。一九〇八年春に湯屋の寿湯を建築し、湯屋営業人に貸与することになった。大人一銭、子ども五厘と低料金にし、湯屋からの収入は一ヶ月に八三円にもなった。そしてその八三円から、親友夜学校への援助や貧困な家庭の税金補助、窮民に対する救助などに宛てたのである⁽²⁸⁾。そして七月九日には、下鴨警察署の指導により講の総会がおこなわれたのであった⁽²⁹⁾。この講の湯屋による部落改善は、下鴨警察署の指導により講主となつた田中部落の有力者を中心とした部落民衆自身の取り組みであった。

一九〇八年二月四日、田中部落において幻燈談話会が開かれると報じられた。⁽³⁰⁾これは田中部落が「不就学者多く労働に勉めて相当の収入あるも兎角浪費に流れて貯蓄の念なく古来の習慣を脱せざる」と認識していた下鴨警察署長が、「通俗的に就学、矯風、貯蓄に関する講話会」にしようとしたものであった。この幻燈談話会には、田中部落の開光寺において戊申詔書俸読式としておこなわれた。⁽³¹⁾戊申詔書は一九〇八年一月一三日に發布され、日露戦争後に顕著になった貧富の差の増大と個人主義的な快楽主義を排して国民の儉約と思想善導を図ろうとしたものであり、内務省主導の地方改良運動の精神的支柱としての役割をはたすものであった。この戊申詔書俸読式⁽³²⁾には愛宕郡長をはじめ下鴨警察署長、郡視学、そして一九〇八年四月に教育勅語の推進と善行者の表彰を目的に京都で設立された一徳会的主事らも出席した。郡長は戊申詔書を俸読し、参加した部落の有力者からは「部落改善に係る種々の考案を演述した上、従来未だ何等の会名も附し居らざれば此の際一団体を組織したしとの希望」が述べられ、会名を郡長と視学に請うて自強会と名付けられたることになったのであった。自強会の「自強」とは戊申詔書にある言葉で自らに力をつけて強くするという意味であり、まさに戊申詔書の内容を体現したものであったといえよう。

今後の自強会の事業として決議されたのは、親友夜学校の拡張をはじめ成年女子の裁縫教授、挿花茶札を習得すること、下水の改良、道路の修繕などであった。親友夜学校と裁縫については上田を中心

に従来からおこなわれてきたが、新たに挿花茶札の習得という部落民衆の修養と下水の改良と道路の修繕という環境改善が付け加わったのである。そして自強会の役員として、会長には田中村長の小西源吉、委員には村会議員で郵便局長でも会った早瀬圓蔵ら部落内の有力者ら二五人、顧問には田中小学校長の木村弥一郎と上田静一、田中部落を管轄する駐在所の巡査が就任することになった。

一九〇九年一月二二日に予定の自強会の発会式について報道されたが、⁽³³⁾「四五の熱心者」がいることも示された。⁽³⁴⁾「四五の熱心者」とは、下鴨警察署の意を受けた田中部落の有力者四・五人のことであろう。そして一月二二日、独証寺において自強会の発会式が開かれた。⁽³⁵⁾発会式は親友夜学校の生徒と思われる子どもらの君が代斉唱で始まり、京都府知事をはじめ愛宕郡長、下鴨警察署長、郡会議長、鐘紡京都工場長、柳原町矯風会長らが祝辞を述べた。これに対して自強会長の小西が答辞を述べて、発会式を終えた。場所を別の寺院に移して記念撮影し、祝宴も催された。来賓として参加したのは祝辞を述べた者のほか、府視学をはじめ郡視学、郡書記、近隣町村長、小学校長らであった。会員は二五〇人にも達し、基金は五〇〇円余りと潤沢であった。自強会の基金は、講からの利益でまかなわれたと思われる。このように自強会は、警察や地方行政から期待されて設立されたのであった。

そして自強会の設立と同時に田中部落において改善として取り組まれたのが、下水の改良と道路の修繕であった。また自強会では一

九〇九年二月一六日に婦女子集会を開き、幼稚園を設立することを決議した。⁽³⁶⁾これは「幼児の間食悪戯等を取締り、一つには危険に近寄らしめぬ為」というだけでなく、より積極的に「矯風の最も近道は幼児よりの習慣を作るにあり、子供さへ良く教育すれば未来の人物は自然に善良となる」と考えたからであつたが、実現には至らなかつたと思われる。

一九一〇年一月二三日、親友夜学校において自強会一周年記念会が開かれた。⁽³⁷⁾まず君が代の斉唱で始まり、会長の小西が戊申詔書を奉読するとともに一年間の会務を報告した。そして善行者として二人が表彰され、反物が贈呈された。このことは自強会設立の趣旨からして、戊申詔書に沿つた行動が評価されたのであろう。祝辞は府知事代理をはじめ愛宕郡長、下鴨警察署長、柳原町矯風会長らが述べ、来賓として府會議員、府視学、郡書記、そして部落改善運動家として名を馳せていた柳原町の桜田儀兵衛らも参加した。

愛宕郡では戊申詔書が發布されてから報徳会を設置し、風俗矯正と勤儉力行に力を注いでいた。その一環として田中部落の自強会を重視し、田中村長に代わつて愛宕郡長の兼田義路が自強会の会長となつた。⁽³⁸⁾郡長は矯風と矯正とともに、田中部落における生活困窮者の対策に乗り出した。郡長は田中村長の小西に命じて、質屋が誰から質物を受け取っているか、高利貸しはどのような方法で利殖を取っているか、家主はどのように家を貸して利益を得ているかなどを調査しようとした。戊申詔書の趣旨を徹底しようとすれば、田中部

落において生活の困窮をもたらすと考えられる質屋や高利貸し、家主を取り締まる必要が出てきたのである。そして九日には自強会の会議を開き、これらに関する規定をつくつて引き締めようとしたのであつた。つまり多くの生活困窮者を抱える田中部落に対して矯風や勤儉貯蓄を勧めるだけでは戊申詔書を基本とした部落改善には十分であるとの認識から、生活困窮者に加重の負担を強いていると考えられる経済的有力者に規制の網をかけようとしたのであつた。ただ経済的有力者を規制しようとすれば反発が起こるのは必至であり、また田中部落の総意を代表する自強会が空中分解する可能性もあり、必ずしも愛宕郡長の方針は容易に実現できなかつたと思われる。

しかし自強会の活動として継続的に取り組まれたのは、両本願寺から招いた布教使による隔月を基本とした精神講話であつた。⁽³⁹⁾この自強会の精神講話は、田中部落の自強会員とともに親友夜学校からも参加した。⁽⁴⁰⁾ここでは一九〇九年十一月九日に親友夜学校の女生徒が「村愛」について話をしたように、⁽⁴¹⁾親友夜学校の子どもも演壇に立つこともあつた。また一二月九日の精神講話では、寺院の住職が「耶蘇教ノ此ノ村ニ入ラザルコト」を述べ、また郡長は持論である勤儉貯蓄を強調し、さらに鐘紡京都工場長は社会の標準となるべき人物について述べたが、上田は住職の講演については「我量のせまき」を感じるばかりであつた。⁽⁴²⁾また自強会ではバイオリンの演奏など情操教育と思われるものにも力を入れ、時として「講元諸氏ノ行

為村ノ為メニアラズ却テ自強会ノ主意ニ反スル言ヲ以テ一場ノ演説ヲセナリ」と田中部落の有力者を批判する演説もあった。⁽⁴³⁾ 上田自身も自強会に深く関わっていたため、本願寺に講師の依頼のために出向くこともあった。⁽⁴⁴⁾ 自強会の設立からして戊申詔書に重きがおかれ、それを体現したものが精神講話であったといえよう。

四 部落改善に取り組んだ醇成青年会

田中部落には近代に入って、若中と称する男性を組織した青年団体があつた。⁽⁴⁵⁾ しかし団則や会則のようなものはなく、時に何らかの行事をおこなうだけであつた。また女性の青年に関する団体は、全く存在していなかった。田中部落における青年会結成は一九〇六年一月の親友夜学校に端を発し、当初は親友夜学校に出席する青年を統一するために「智徳ノ研修風紀ノ改善相互ノ親密」を図つて⁽⁴⁶⁾ いた。そして親友夜学校の卒業者と田中部落在住の青年を統一するために、一九〇八年一月一六日に親友夜学校において田中村青年団の発会式が開かれた。団長に上田、副団長に佐々木浅吉、幹事長に鍵田清三郎、幹事に吉田寅吉、篠原勇三郎、篠原谷蔵の三人が選ばれ、会員は二〇人であつた。発会式の後、余興として運動会がおこなわれた。

一九〇九年九月一八日には田中村青年団は愛宕郡青年会支会とし、同時に会名を醇厚青年会とすることにした。会名の「醇厚」とは、

おそらくは人情の厚いことを意味する戊申詔書にある言葉から採つたのであろう。醇厚青年会となつて、会則も整えられた。⁽⁴⁷⁾ 事務所は親友夜学校に置かれ、「本会ハ会員相互ノ親密ヲ計リ智徳ノ修養実業上ノ研究風紀ノ善良共同貯金等ヲスルヲ以テ目的トス」とされた。会員は、田中村に在住する一五歳から三〇歳までの通常会員、醇厚青年会の趣旨に賛成して金品を寄付する賛助会員、役員会で推薦を受けた名誉会員の三種類に分けられた。役員としては一人の会長と二人の副会長、そして若干名の評議員と幹事を置くことになり、任期は二年であつた。また経費は会員の余暇労働と廢物利用の貯金で賄うことになり、模範となるべき善行美事ある者は表彰し、逆に会の体面を汚す者には除名することも決められた。また細則では公徳と勤儉、共同貯金と個人貯金を実行すべきことも決められた。このように醇厚青年会は自強会と同様に戊申詔書の趣旨に添って、警察や地方行政の指導によって部落改善を実行していこうとするものであつた。

醇厚青年会となつた時点で会長には浅井清三郎、副会長には小林勘蔵と上田、評議員には松下清三郎、篠原重三郎、早瀬圓蔵、幹事長に寺田清四郎、幹事に佐々木浅吉、鍵田清三郎、篠原勇三郎、篠原谷蔵、吉田松次郎、広崎広吉、杉原よし、西山すて、宇津木はるらが選ばれ、会員は男七〇人であり、また一九〇八年六月に設置された女子部⁽⁴⁸⁾に参加したのは二〇人であつた。醇厚青年会は愛宕郡青年会の一青年会として位置づけられるようになり、また役員にも村

長をはじめ田中村役場が深く関係するなど、地方行政の指導が強く反映されたものとなったのである。会員も設立時の二〇人から九〇人と大幅に増えることになった。そして一九一〇年一月一七日には、醇成青年会は名称を醇成青年会に改称した。しかし、この名称の変更は会則の変更など会の性格を変えてしまう本質的なものではなく、あくまでも醇を厚くするというよりも醇を成すという強い決意を表現しようとしたものであったと考えられる。

醇成青年会が取り組んだのは、軍隊への入営者と退営者に対するものであった。入営者に対しては盛大な送別会が開かれたが、一九一〇年一月二七日の松下清十郎の送別会では会長の開会の辞に始まり、饗別贈呈、祝辞、入営兵答辞、唱歌、講話、茶話会などと続いた。とくに講話では戦果を挙げた兵士の話が中心となり、国家に忠誠を尽くすことが強調された。軍隊への入営者に対する送別会は村役場や部落全体のものであったが、これに醇成青年会が積極的に関わったのであった。また醇成青年会では、図書部が設けられた。一九一一年二月には醇成青年会の経費から図書を購入し、図書規則を作成するとともに保管者も決めた。そして三日には上田ら三人が寺町へ行って一円一〇銭で図書を購入し、六日には貸し出しを始めた。

醇成青年会は、仕事に関係する活動もおこなった。醇成青年会には理髪部が設けられ、一九一一年二月二五日には親友夜学校に通う子どもや大人の調髪によって金を徴収して醇成青年会の資金とした。

また一九一〇年一月一日には、親友夜学校で開かれていた裁縫部に通うことを奨励するほどであった。田中部落の改善団体である自強会からは、一九一二年三月二九日に醇成青年会に対して七台の人力車が贈呈されることになった。⁽⁴⁹⁾そこで醇成青年会では、翌日に人力車の運用について協議することになった。そして五月一日には醇成青年会では会員から貸与者を選定し、一人から貸賃料を受け取った。しかし五月三〇日には人力車の賃借料を納めない者に督促することになり、六月六日の醇成青年会の役員会では未納者の問題について議論をおこない、一〇日には未納者の一人を呼び寄せて督促をしなければならぬほどであった。

醇成青年会の活動として重視されたのは、親友夜学校への援助であった。一九〇八年八月一日には、八六人の会員が親友夜学校の敷地に鴨川から砂利を五坪五合分を運んで地盛をおこなった。また一九一一年一〇月二三日には親友夜学校とともに運動会を開催した。この日は秋祭りの休日とも重なり、運動会を開催したのは「新京極等へ行き金銭ノ消費ヲ防ガン為」であった。準備の中心を担ったのは醇成青年会であり、演技には約一五〇人が参加した。醇成青年会の設立自体が親友夜学校と密接に関係していたが、その醇成青年会の活動においても親友夜学校と連携した取り組みが重視されたのであった。

五 田中部落の混乱と自強会・醇成青年会

醇成青年会の会長を務めた浅井については、一九一二年五月に田中村から愛宕郡長に対して功勞表彰の稟申がなされた。⁽⁵⁰⁾ この表彰については、上田が強く働きかけたものであった。⁽⁵¹⁾ 浅井は一八六八年に生まれ職業は質商であり、「性行温厚篤実、能く衆人の敬慕する処」と評され、田中部落の「矯風改善」に力を注いだことが高く評価された。とくに注目されたのは講によって資金を捻出して親友夜学校を安定的な運営に導き、また自強会と醇成青年会に尽力したことであった。ただ、この表彰は浅井が病魔に侵されていたから、少しでも早く授与させようとするものであったと思われる。田中部落の改善は、浅井の力添えを無視して成り立つものではなかったのである。そして五月一六日、浅井は四六歳の若さで亡くなったのであった。この時、上田は「同氏ハ本村ノ為メ最モ惜ムベキ人也、本夜学ヲ建設ヨリ自強会青年会（全会長）ノタメ大イニ尽力セシ人ナリ」⁽⁵²⁾と最大級の賛辞を捧げるほどであった。

醇成青年会の評議会では、一九一二年九月二四日に役員については選挙で選ぶことを決定した。⁽⁵³⁾ このような決定になったのは、おそらく醇成青年会の会長である浅井が亡くなってから会長は不在であり、また新しく役員を選出する必要があるためであろう。そして二七日には七〇人が出席して選挙がおこなわれ、会長に評議員であ

った篠原重三郎、副会長には従来どおり小林勘蔵が当選し、翌年一月一日から就任することになった。⁽⁵⁴⁾ そして一九一三年一月一六日には醇成青年会の総会が開かれて新たに副会長に上田、会計に副会長の上田と広野政吉、評議員に寺田清四郎ら八人、幹事に吉田平三郎ら八人が就任し、あわせて講演は柳原部落の明石民蔵と上田がおこなった。⁽⁵⁵⁾

教育講の中心人物である浅井の死は、田中部落と部落改善運動に大きな混乱をもたらすことになった。⁽⁵⁶⁾ とくに浅井は教育講の講主となっていたが、田中部落の親友夜学校と改善運動は浅井の手腕や信頼によって支えられていたのである。講主は容易に決まらず、上田は田中村長や愛宕郡長、下鴨警察署長、早瀬ら講の世話人であった部落内の有力者に相談した。⁽⁵⁷⁾ 上田が激しく動いたのは親友夜学校の維持のためには早く講主を決める必要を認識したためであり、浅井の娘であるせいに引き継がれようとした。ところが一月一五日に講の世話人であった一人が講の金を使い込んで返済不可能となり、自殺してしまった。この自殺事件をきっかけに、教育講だけでなく田中部落の財政を担っていた湯屋講、消防講、道路講など各講においても不正が摘発され、田中部落の講運営は乱脈を極めたのであった。また田中部落の住民だけでなく柳原町や滋賀県の議員も講金の払い戻しを要求して田中部落に押し付けてきたため、浅井家は講金の払い戻しをおこなって事態を沈静化しようとし、家産までも整理しなければならなかった。このような状況から講主は決まらず、講

そのものが破綻していったのである。

また田中村当局は村の規定を盾に村長が親友夜学校を管理監督することや田中小学校校長が親友夜学校の教員を監督管掌するなどの規制をかけようとし、これに同意するよう親友夜学校の会長代理としての上田に迫った。⁽⁵⁸⁾ 規制は本来は公立のものに適用されるものであったが、明らかに私立である親友夜学校に規則を適応して支配権を行使しようとするものであった。しかし独断で決定できないという上田が同意しなかったため、田中村当局は一九一一年から交付していた親友夜学校に対する補助金を一九一三年八月三〇日から停止したのである。これは上田がいうとおり、上田を快く思わなかった村長と校長の二人の策謀であった。そして翌日に上田は村長と話し合ったが埒があかず、結局は村当局の支援を受けず独力で親友夜学校の運営を決定したのであった。⁽⁵⁹⁾ しかし九月五日になって村長は早瀬と浅井と勝手に合意したため、上田は親友夜学校の教員を辞す決意を固めたのであった。ただ郡長らは上田の功績をかつていて、上田が留任して従来どおり親友夜学校を続けることを模索した。そして上田をはじめ村長や校長、田中部落の有力者を呼んで協議を重ね、解決を模索した。ただこの間も村長や校長は上田に敵意を抱き、村長は上田を部落の出身であると思つて出生地の戸籍を調べるほどであった。

このような混乱の最中にあつても、上田は独力で親友夜学校を続けた。しかし親友夜学校の実質的な所有者である浅井は、村長と校

長の意に添つて解決しようとした。そこで醇成青年会は一九一四年一月二七日に中間的な立場で解決にあたるとし、交渉委員として会長の篠原と賛助会員の寺田を選んだ。⁽⁶⁰⁾ そして一月二九日には寺田を中心に醇成青年会からも上田が村長に歩み寄るよう記した請願書が上田の元に届き、これに上田は仕方なく従うことにしたが、校長と村長は郡に任せるといふばかりであつた。⁽⁶¹⁾ そこで醇成青年会は二月一二日に郡に対して親友夜学校存続の請願書を送り、校長と村長に解決を迫るよう求めた。この動きは、明らかに上田の側に立ったものであつた。ただ田中小学校の教員は上田には快く思はず三月一三日には上田に対して転任の勧告書突きつけるほどであつたが、上田は拒否した。⁽⁶²⁾ またこの動きに対して、田中部落の小学校卒業生は上田を支持して転任を防ごうとした。そしておそらく田中部落の有力者から依頼を受けた柳原町の明石らも調停に乗り出し、また郡などの指導もあり、四月から田中村の補助金が親友夜学校に支給されることになった。そして一九一五年一〇月八日には親友夜学校の負債償還方法と運営条件が決められた。これにより上田は親友夜学校の二階に住むことができなくなり、また単なる田中小学校の親友夜学校赴任教員に位置づけられることになったのである。

この親友夜学校をめぐる問題は、田中部落に大きな影響を及ぼすことになった。浅井の死と講の不正問題によって、部落改善団体として田中部落全体に影響力を行使していた自強会が機能しなくなったのである。このことを、上田は「村内設立自強会不振の爲め青年

会之れを引受け事業部人力車十五台の整理を成す」と記している⁽⁶⁴⁾。事実、上田が詳細に出来事を記録した親友夜学校の「日誌」にも、自強会の記述は全く出てこなくなった。自強会が機能しなくなったのは役員に名を連ねていた田中部落の有力者から講の不正者を出し、また有力者間においても個々人の思惑から意見対立が起こって統一した行動をとれなくなったためであろう⁽⁶⁵⁾。それでも自強会には、資金だけは残っていた。そこで一九一五年二月一六日、上田をはじめとした七人の親友夜学校関係者は親友夜学校の修繕などに充てるため自強会の残金六〇円余りを提供するよう関係者に依頼し、一二⁽⁶⁶⁾人から許可を得た。この時点で、自強会は完全になくなったのである。その後、自強会の再興の動きもあったが、立ち切れになってしまった。そして上田の記すとおり人力車に関する事業など、自強会の役割を引き継いだのが醇成青年会であった。

醇成青年会は親友夜学校の存続について統一した動きをとり、夜学校の存続など村長や校長らと対立してまで田中部落のために尽くす上田を一貫して支持した。例えば一九一四年四月二日には醇成青年会主催の村民大会を開き、会長の篠原や副会長の寺田や上田、そして多くの役員が壇上に立って田中村の村費で親友夜学校を運営すべきことを決議し、部落内の村会議員である松下清三郎をはじめ篠原、寺田ら三人が交渉委員に選ばれた⁽⁶⁷⁾。四月九日には青年と村民一同の集会が開かれ、交渉委員の報告を受けて強行に解決のために関係者に迫ることが決議された⁽⁶⁸⁾。先に見た一九一五年一〇月八日の親

友夜学校の方向性を決めたのも、上田とともに動いた醇成青年会の尽力であった。そして醇成青年会において指導力を発揮したのが、寺田であった。また一九一四年七月二五日に開かれた醇成青年会の評議会では、昨年まで土木請負業者の主催であった盆踊りを醇成青年会の主催にすることにし、また風紀を改善することなどを決めた⁽⁶⁹⁾。つまり醇成青年会が田中部落の総意を代表する団体として、田中部落に関わる重要な問題において重要や役割を果たすことになったのである。

六 上田静一の帝国公道会への接近

一九一三年一〇月二日に上田は柳原町の明石を訪ねた際、一〇月一六日から十一月一日にかけて内務省主催の第六回感化救済事業講習会が開かれることを聞いた⁽⁷⁰⁾。この講習会は、部落改善についても重要な課題としていた。上田は一四日に東京に向かい、翌日は上野の旅館に宿泊し、一六日には内務省で開かれる講習会に出席して「我が教育二関する経験談と題する演題」で講演することを申し込んだ⁽⁷¹⁾。そして一七日には慈善事業に関する学校や病院を視察したが、この日に京都から電報があつて帰京しなければならなくなった⁽⁷²⁾。翌日の一九日には京都に着くという慌ただしさであり、上田は「余は残念なりき余の意見も発表出来ず講習会全部終へざるが誠二残念なりき」と「日誌」に書き記すほどであった⁽⁷³⁾。上田は親友夜学校の状

況と経験を講習会で発表しようとしたのであり、また内務省の部落改善に関する考えや各地の報告を聞いて田中部落の改善に役立てようとしたのであろう。それが証拠に上田は講習会について「一、社会改善ニ関する協議会、二、社会改善講習会、三、東京市ニ於ける社会事業の視察」と述懐していたが、実現したのは視察だけであった。上田が残念がったように、この目的は何らかの田中部落の事情が優先されたため達成されなかったのである。

上田が東京を拠点とした中央融和団体である帝国公道会⁽⁷⁵⁾と初めて接触を持ったのは、一九一四年一〇月三日に帝国公道会講師の岡本道寿に会った時である。⁽⁷⁶⁾岡本は田中村役場を訪問して村長と相談し、上田とは部落改善について意見交換して二三日に開かれる醇成青年会秋季大会の講演を依頼されたのであった。そして二三日には醇成青年会秋季大会において、明石とともに講演をおこなったのである。⁽⁷⁷⁾二六日には柳原町において部落改善に関する講演会があり、帝国公道会の会長である大江天也と岡本が講演をおこなった。上田は招待を受けて醇成青年会の数人とともに参加したが、大江に対して「維新当時の一明星として夙ニ其の名高く旧穢多民族を廃することに尽力せられ其の後政界ニ一角を著はし今や社会改善ニ尽瘁せらる、人」と高く評価した。⁽⁷⁸⁾上田は帝国公道会と大江に好意を抱き、部落改善の新しい方向を探ろうとしたのであった。

そして、さきに見たように親友夜学校についての問題解決の方向について一定の結論をみると、上田は本格的に部落改善の新しい方

向について模索するようになった。一九一六年二月八日、上田は明石の名前を添えて大江に書簡を送った。⁽⁷⁹⁾まず「貴会御旨意ニ対し窮かに共鳴致居候」と帝国公道会に賛意を表し、自らが「企図する処有之直ぐに着手せん」としつつも「経験ニ乏しく実行上不勘困難を感じ」ているが「卑見陳述」すると書簡の意図を述べた。そして近年は部落改善が盛んになってきたが成績は芳しいものではないとして、次のような問題点と課題を指摘した。第一は、「永年蟠居せる陋習ハ牢として抜く不能教育其の他消極的事業は到底顕著なる成績を挙ぐる能はざらん」ということであった。第二は、「彼等部民の職業範圍は殆ど因習的ニ限定」され、「其の職業は品性陶冶の上ニ於て不知不義」であるから「劣等なる性格を養ひ向上發展の氣風を養ふに足る職業にあらざる」という職業上の問題点であった。第三は、部落を真に改善しようとすれば部落民衆を「広々万般社会ニ出して諸種の事業ニ従事せしむニ有り」ということであった。第四は、「益々教育、宗教、其の他諸般の改善を計り、外ニ積極的發展向上の業務ニ従事せしめ」る必要があり、その第一歩として「近村有志相謀り部落青年をして北海道ニ出し開拓移民出稼事業ニ従事せ」ていこうということであった。とくに北海道は「部落民の開拓移民出稼地として将来有望地」であり、帝国公道会としての「助力」と「政府ニ交渉」の意図があるかどうかを問い合わせたのであった。この書簡の内容は、『日誌』でも要約的に記された。⁽⁸⁰⁾つまり積極的な部落改善事業として様々な職業に部落民衆に従事させることが必

要であり、その中心に北海道移民が位置づけられたのであった。そして、その実現のために期待したのが帝国公道会であった。この書簡の執筆時点で上田は親友夜学校を拠点とした部落改善から、より積極的に社会に進出するための職業の問題を解決する北海道移民を基本とした部落改善に転換していったといえよう。

二月一二日になって、大江から上田宛に返書が届いた。⁽⁸¹⁾この書簡で大江は具体的には回答しないが、北海道移民のために田中部落の人びとの勧誘を開始することを指示し、また三月五日に柳原町に懇談会に行くから話し合おうと回答し、あわせて北海道移民の手引き書と取扱規定を同封した。そこで上田は一九日に田中村村長に会って部落の職業の改善について話し合い、そのためには北海道移民が最適であることを進言したのである。⁽⁸²⁾

三月五日、柳原町の柳原町尋常高等小学校において関西有志懇談会が開かれた。⁽⁸³⁾この懇談会では政府および両議院へ積極的な部落改善の推進を要請することや内務省や府県に対して部落に直接補助することを要請すること、文武官に部落民私有を積極的に任用するよう要請すること、公文書から「特種部落」など忌むべき文字を記載しないよう要請することなどが決議された。上田は「部落民の共同職業を興す必要なきか」という提案をおこなったが、審査のうえ後日に譲ることになった。⁽⁸⁴⁾この上田の提案は具体的には「社会改善の方法として海外移民を主張」したものであり、半年後に上田自身は「反対論者（反対はなかりしが至難として反対せられたり）あり

しも、余は如何にもして之れが実現を計られんとし遂に北海道移民に着せしなり」と振り返り、⁽⁸⁵⁾後年には「殖民地移住問題白熱化す」とも記された。⁽⁸⁶⁾つまり「共同職業」とは、部落民衆の「海外移民」および「殖民地移住」であった。この懇談会では帝国公道会の幹事である林抱明とともに出席した大江は講演をおこなったが、途中で退席して田中部落において林とともに二時間にわたって講演をおこなった。⁽⁸⁷⁾これには二〇〇余人の聴衆が集まり、ここで大江が返書で示していたとおり上田と北海道移民について話し合い、前年から帝国公道会でも取り組んでいた北海道移民について説明しつつ上田に協力を約束したと思われる。大江は一二日になって、上田に書簡を送った。⁽⁸⁸⁾ここでは田中部落から一人も帝国公道会に入会していないので、醇成青年会だけでも急いで入会してくれるよう依頼した。そこで上田の依頼を受けた醇成青年会と親友夜学校は、帝国公道会の通常会員となったのである。⁽⁸⁹⁾

四月中旬から六月初めまで、上田は『日誌』に記述していない。⁽⁹⁰⁾おそらく夜学校についても、ほとんど関わりをもっていなかったであろう。そして七月二五日になって、田中部落の人力車夫一同から上田に依頼の文書が届けられた。⁽⁹¹⁾まず初めに子どもや青年が上田の「厄介」になっていることを感謝し、自分たち車夫は三年前より生活に困っていることが記された。また近年は馬車屋ができて急に人力車の客が減り、一ヵ月平均で客が一人、収入は一〇円から一二円にしかないという状況であり、「これではとても生活が

出来ません」と窮状を訴えた。しかも車夫が増員されることになり、自分たち約二〇〇人の車夫と家族一〇〇〇人の家族は生活が立ち行かなくなり、他に仕事もなく困っているという。また近頃では二日に一人の客もないことがあり、車夫が集まって相談しているが「どうしてよいのかわかりませず」という状況であるという。そこで「千人の者をたすけると思ひ私等の困難をお察し下さって私等生活の道を計かつて頂きたうございますここに車夫連名してお願ひ致します」と、上田に助力を依頼したのであった。文字はたどたどしく文面もこなれているとはいえないが、それだけに窮状と切迫感が伝わるものであった。依頼文に記された連名は田中部落の車夫一〇二人であり、全体で約二〇〇人とされる車夫の約半数であった。⁽⁹²⁾

そこで上田は、三十一日に田中部落の車夫一同から下鴨警察署長の藤田弥助宛に請願書を提出した。⁽⁹³⁾まず乗用馬車が許可されてから乗用馬車が人力車を破損したり、人力車が乗用馬車を避けたりすることが多くなり、車夫にとっては危険になるばかりか人力車の客に迷惑となっているという状況が記された。また狭い道路に乗用馬車を並べるだけでなく馬を馬車にくくりつけて放置することもあり、これが人力車の乗客ばかりではなく一般の通行人にも迷惑を掛けているという。そこで修学院村花園橋から北については乗用馬車の通行を取り消し、川端柳元にある馬車の停留所を道路以外のところに特設してほしいと請願したのであった。車夫一同は単に生活の窮状を訴えたものであったのに対して、上田は警察署が許可していた乗用

馬車が如何に危険なことをしているかということ述べ、許可の取り消しと実現しないであろう停留所の特設を要求して、車夫の生活を守ろうとしたのであった。しかし請願書は拒否され、新たに京都府警察部長に請願書が提出された。⁽⁹⁴⁾ここでは乗用馬車が許可された時に人力車夫から一部取り消しを要望し、今回も乗用馬車の増加に際して下鴨警察署長に請願書を提出したが許可されなかったことが述べられた。しかしこれでは危険きわまりないので、京都府警察部として調査してほしいと請願したのである。この請願書の結末は明らかでないが、一九一五年一〇月から京都市内の約三〇〇〇人の人力車夫は車賃値上げを計画し、⁽⁹⁵⁾一九一七年九月には京都府知事は車賃の値上げを認可した。⁽⁹⁶⁾しかし人力車夫の生活は一向に改善されず、警察は取締を強化するばかりで、人力車夫も自らの生活を守るために組織化を図らなければならなかった。⁽⁹⁷⁾ともあれ人力車夫について上田は積極的に援助したが、これが上田にとって田中部落での具体的な活動の最後となった。そして九月からは北海道移民の実現に向けて本格的に奔走していったのである。⁽⁹⁸⁾

おわりに

以上で田中部落の改善運動と上田の関係についての検討を終えるが、内容について簡潔に纏めておきたい。上田は田中尋常小学校に赴任してから直後に親友夜学校を開設し、また田中部落の改善構想

をまとめた。その改善構想は子どもの教育を中心におきながらも、田中部落の生活をはじめとした全般に関するものであった。その背景には、田中部落の深刻な生活状況があった。すなわち職業構成からくる部落民衆の極度の貧困であり、それにより税金さえ払えないという状況であった。そして戊申詔書の内容を実現するため、愛宕郡をはじめ田中村、警察などの指導によって田中部落に改善団体として自強会が設立された。この自強会は講を組織した田中部落の有力者によって担われ、上田も積極的に参加した。自強会は田中部落の生活改善とともに戊申詔書に添って部落民衆を善導することに力を入れ、田中部落において大多数の部落民衆を組織した自治組織の役割を果たした。また上田らの指導によって醇成青年会も設立され、自強会と連携した活動をおこなった。しかし講の不正問題に端を発して田中部落が混乱し、田中部落内の有力者を中心とした自強会は機能しなくなり、醇成青年会が田中部落の改善と自治組織の役割を担うことになった。また上田は親友夜学校を中心とした改善に限界を感じ、海外および植民地への移民を軸とした部落民衆の職業の改善こそ必要であるとして中央融和団体として内務省など政府にも影響をもっている帝国公道会に接近していった。そして上田は田中部落内では人力車夫を応援した取り組みもおこなったが、結局は北海道移民に奔走していったのである。

最後に以上の田中部落における改善運動についての纏めをふまえつつ、いくつかの論点を提示しながら今後における部落改善運動史

研究の課題を展望しておきたい。まず第一は、部落改善運動の特質と矛盾についてである。本稿では中心的課題としなかったものの田中部落においては子どもを対象とした親友夜学校が改善の機軸となり、問題点も親友夜学校をめぐる噴出することになった。それだけ子どもの教育が田中部落において深刻であり、親友夜学校での取り組みを通じて生活全般についての改善に突き進むことになった。田中部落の改善は愛宕郡や田中村の指導によって設立された改善団体としての自強会や醇成青年会が担うことになったが、その中心となったのは田中部落内の有力者であった。しかし自強会や醇成青年会に多くの部落民衆が参加したのは、子どもの不就学や貧困の克服が切実な課題となっていたためであった。その意味で田中部落における改善運動は官製的な側面をもちつつも、有力者を中心とした多くの部落民衆による自発性を喚起した自主的な側面をもっていたといえよう。

この官製の側面と自主的側面を統一していたのが、田中部落に居住して夜学校を軸に活動していた上田であった。上田は熱心に愛宕郡や田中村など地方行政に働きかけるだけでなく、田中部落の独自の調査をもとに部落民衆に働きかけ、改善に対する信頼と積極性を引き出していたのである。ただ改善には一定の経費が必要であり、田中部落の場合は有力者を中心とした講によって経済的に支えられていた。しかし講が健全に機能しなければ部落民衆に負担を強いる結果となり、当然に地方行政に積極的な財政的支援を要請する

ことになった。しかし地方改良運動の一環として展開された部落改善運動は部落自身の経済的改善によって安定的な納税を実現していくこととしていたため、地方行政の積極的な財政的負担は望むべくもなかった。かくして部落改善運動は官製的な側面と自主的な側面の矛盾の板ばさみに陥って沈滞を余儀なくされ、部落民衆に対する影響力を低下させていったのである。田中部落における改善運動だけでなく広く事例を検討することによって、部落改善運動の特質と矛盾を明らかにしていくことが必要であろう。

第二は、部落改善運動における青年会および青年団の役割についてである。田中部落において主として改善を担うことになったのは、有力者を中心に多くの部落民衆を組織した自強会であった。しかし自強会は地方行政に指導された田中部落の有力者を中心に運営された講を経済的基盤としていたため、講に不正などの問題が起ると機能しなくなっていく。そして自強会の役割を引き継いでいったのが、上田らによって組織された醇成青年会であった。醇成青年会の役員は主として田中部落の青年層が中心となっていたため、自強会に比して自主的側面が強かった。醇成青年会の設立こそ戊申詔書の徹底という課題を担った官製の側面をもつものであったが、設立以降の活動については自主的活動の許容範囲が広がったといえよう。したがって自強会が機能しなくなっても、醇成青年会が自主的に部落改善の役割を引き継ぐことが可能となったのである。

このことは田中部落だけでなく、他の部落でも同様であった。例

えば本稿において柳原町として登場した東七条部落でも青年団が設立されたが、その自主的な性格を強めつつ部落内において統一した行動を執るようになり、第一次世界大戦後は官製的な統制から距離をおいて差別糾弾闘争にまで進出するようになっていった。⁽⁹⁹⁾それゆえに部落差別という領域においては、部落内に最も影響力ある自治組織としての役割を果たすようになったのである。このように日露戦争後においては部落内で組織された青年層が影響力をもつようになり、この動向は第一次世界大戦後においては部落内で決定的な位置を占めるようになっていったのである。全国水平社創立に決定的な役割を演じるようになった奈良の柏原部落における燕会などの青年組織は、そのことを示す最も象徴的かつ代表的な事例であるといえよう。その意味で日露戦争後に全国の部落で設立されて第一次世界大戦後に影響力をもつようになった青年会や青年団などの青年組織の研究は、部落改善運動をはじめとした部落の動向を解明するうえで極めて重要であるといえよう。

第三は、部落改善運動と融和運動・水平運動との継承関係についてである。本稿の対象時期からすれば、この論点に接近するには無理であるかもしれない。しかし敢えて接近するために、本稿で対象とした時期に続く田中部落における若干の動向をふまえておきたい。田中部落では自強会が機能しなくなつてから醇成青年会が一定の役割を果たしていたものの、本格的な部落改善団体は容易に生まれなかった。ようやく一九一九年二月二〇日、田中部落において部落

改善団体として大正会が設立された。⁽¹⁰⁰⁾ 事務所は親友夜学校に置かれ、会員資格は田中部落居住で二〇歳以上の男性であり、会員は約一三〇〇人であったという。これは自彊会に比して、大衆的な部落改善団体であった。事業として掲げられたのが、衛生の設備をはじめ教育の奨励、風俗の矯正、勤儉心の涵養、知識の啓発などをおこなうことであった。大正会の設立そのものは上京区長に指導されたもので、会長には下鴨警察署長、副会長には寺田清四郎、評議員には二人の田中部落内の有力者が就いた。

ここで注目すべきは、寺田清四郎である。かつて寺田は醇成青年会の中心的人物の一人であり、講不正問題の処理で頭角を表して田中部落内で影響力を行使した人物であった。この寺田は田中部落内で大正会副会長という改善団体の幹部であったが、同時に一九二二年四月二日に京都府水平社が創立されると委員長に就任したのである。⁽¹⁰¹⁾ しかし寺田は京都府水平社委員長を務めながらも、大正会副会長を続けたのである。寺田に例をとると部落改善運動から水平運動に転身したといえるが、そのまま部落改善運動をも継続したのである。そして寺田は、融和運動には顔を見せなかったのである。田中部落の貧困な状況を目の当たりにすると部落改善は必要不可欠なものであったが、社会に存在する部落差別に直面すると社会に反省を求めて融和を図ろうとする融和運動ではなく、差別糾弾という名の社会に対する抗議を軸とした水平運動に部落差別克服の展望を見出したからであろう。とはいえ寺田は、田中部落においては改善運動

を継続していったのである。

ところで部落改善運動や融和運動、水平運動は、部落を拠点とした場合には位相が異なるものであった。あくまでも部落改善運動は実現に至ろうとすれば、自らが居住する部落を拠点としなければならなかった。しかし融和運動は社会に反省を迫って部落と部落外の融和を図ろうとしたものであったため必ずしも部落を拠点とする必要はなく、いきおい地域社会や社会全般を対象とするため個別の部落を越えて市町村や府県、全国に網を広げねばならなかった。また水平運動は地域社会の部落差別に対して糾弾闘争を展開するため居住地である部落を拠点に部落民衆を組織し、また同時に部落差別を維持・容認する社会に対しても諸課題などを投げかけるため全国的規模で組織化を図る必要があった。そして水平運動は恩恵的な改善や融和を拒否していたが、とくに部落の生活に密接に関わる改善そのものに関しては決して否定していなかったのである。その意味では部落改善運動は融和の論理を内包していたが、部落を拠点とすることが運動としては水平運動と相容れないものではなかったのである。つまり基本的には部落改善運動は融和運動や水平運動に転化したのではなく継続されたのであり、融和運動と水平運動の底流をなしたのであった。そして部落改善運動は内包する融和の論理から融和運動に転化する可能性があったが、同時に部落改善に基本をおきつつ部落差別に対して糾弾闘争をおこなう水平運動にも転化する可能性ももっていたのである。また部落改善運動に携わる人物が個人

- 井岡康時「奈良県の部落改善政策と改善運動―その問題点と課題―」
 「研究紀要」第二号（奈良県立同和問題関係史料センター）、一九九五年三月）、同「奈良県における部落改善事業と水平社運動」
 「研究紀要」第八号（奈良県立同和問題関係史料センター）、二〇〇二年三月）、竹永三男「第一次世界大戦期における部落改善運動の二つの潮流―明治之光」と部落改善運動」
 「第一次世界大戦期前後の支配政策と部落改善運動―水平運動と融和運動の分岐点―」（近代日本の地域社会と部落問題）部落問題研究所、一九九八年）、関口寛「改善運動と水平運動の論理的連関」（部落問題研究）第一四七輯、一九九九年五月）、舟津菊男「木村吉輔の機織伝習場と柏原の自主的部落改善運動」（水平社博物館紀要第三号、二〇〇一年三月）吉田栄治郎「奈良における部落改善運動の環境」（部落史研究）第六号（全国部落史研究交流会、二〇〇二年九月）、手島一雄「明治之光」の群像―大和同志会と三好伊平次―（岩間一雄編「三好伊平次の思想史的研究」吉備人出版、二〇〇四年）、兵庫を対象とした臼井寿光「揖東郡林田下樺村の部落改善運動―自由民権運動との関わり―」（部落問題）第六五号（兵庫部落問題研究所）、一九八二年四月）、高木伸夫「二九一〇年代の部落改善運動 兵庫県における水平運動と融和運動の分岐点―（上）（中）（下）―」（ひょうご部落解放）第二七・二八号（ひょうご部落解放・人権研究所）、一九八七年六・九月）、本郷浩二「地方改良運動期における神戸の部落改善運動 水平運動・融和運動への契機と歴史的前提―」（研究紀要）第一二二号（ひょうご部落解放・人権研究所）、二〇〇六年三月）、福岡を対象とした白石正明「公明会とその同人たち 智覚・三十里・争水―」（部落解放史・ふくおか）第二二〇・二二一合併号、一九八〇年十一月）、首藤卓茂「福岡県の部落改善運動 特に（鎮西）公明会の活動を中心に―」（前掲「部落史研究」第六号）などがある。
- (5) 部落改善運動期における部落民衆の部落民としての主体形成と意識について、私は「破成」に現れた「我は幾多である」という思想の歴史的意味」（大阪人権博物館編刊「島崎藤村「破成」100年」、二〇〇六年）で略述した。
- (6) 田中部落の改善運動については、京都部落史研究所編「京都の部落史」第二巻（近現代）、阿吽社、一九九一年で簡単に触れられた程度である。
- (7) 親友夜学校については、前掲白石「上田静」と田中親友夜学校」と同「上田静一 小論・親友夜学校と北海道移住」を参照されたい。
- (8) 「田中村経営ニ就き思ひ出するまゝ、記入す」（京都府田中町改善ニ関スル書類）。以下の本文の記述では、年月のみを付して引用する。
- (9) 「治北誌」大学堂書店、一九七〇年、一八・五四頁。本書は、愛宕郡役所編刊「愛宕郡村志」、一九一一年を復刻したものである。
- (10) 京都府勤業課「明治十九年臨時「旧機多非人調査」（京都府問題研究資料センター蔵複写資料）。なお、この資料は原田伴彦「明治二〇年前後の部落の状況」部落解放研究所編刊「復刻・東雲新聞」別巻、一九七七年で紹介された。
- (11) 京都府庁文書「明治三十五年「貧民部落調査」（京都府問題研究資料センター蔵複写資料）。
- (12) 京都府「旧機多及非人調査書」一九〇三年五月調（京都府問題研究資料センター蔵複写資料）。
- (13) 「日出新聞」一九〇八年二月二二日付。本稿で使用する新聞史料については、京都府問題研究所編「京都の部落史」第七巻（史料近代2）、阿吽社、一九八五年に収録されたもの以外は白石正明・大藪岳史両氏が収集・整理したものが基本となっている。両氏に対して、記して感謝したい。
- (14) 京都府「旧機多ニ関スル調査」（部落問題研究所蔵）
- (15) 「京都日出新聞」一九一一年一月一七日付（前掲「京都の部落史」第七巻、二七四・二七五頁）。
- (16) 京都府庁文書「町村引継書類・田中村」一九一〇年三月（前掲「京都の部落史」第七巻、二七四頁）。
- (17) 京都府庁文書「町村引継書類・田中村」一九一四年二月（前掲「京都の部落史」第七巻、二八八頁）。
- (18) この時期における京都市内の部落の状況については、横井敏郎「明治後期の都市と「部落」―京都市を事例として―」（部落問題

研究』第一〇五輯、一九九〇年五月）がある。また朝田善之助『新版・差別と闘いつづけて』（朝日新聞社、一九七九年）は、一九〇二年生まれの朝田が幼少であった頃の田中部落の生活状況を回顧していて興味深い。

(19) 『西田中職業別』（上田「京都府田中町調査書類」）。

(20) この数字は戸数としては多いと思われるが、何故このようになったのかは分からない。しかし大まかな傾向は、窺い知れるであろう。

(21) 『大阪朝日新聞』一九〇九年二月二日付（前掲『京都の部落史』第七巻、四三四～四三五頁）。

(22) 『貧富調査簿』（前掲『京都府田中町調査書類』）。これについても、調査の年月日は記されていない。

(23) 『京都親友夜学校建設及河内楠公夫人遺跡再興ニ関スル書類』。

(24) 『京都日出新聞』一九〇八年七月一〇日付。

(25) 柳原町矯風会については、前掲白石「明治末期における部落改善運動の二つの道」に詳しい。

(26) 『大阪朝日新聞』一九〇八年二月二〇日付（前掲『京都の部落史』第七巻、一〇一～一〇二頁）。

(27) 講の運営については、田中部落の改善にも深く関わっていた明石民蔵「講経営利害得失論」（『明治之光』第二巻第八号、一九一三年八月）に基本的な方法が記されている。

(28) 同右。なお前掲朝田『新版・差別と闘いつづけて』によると、この湯屋の経営は朝田の父が始めたという（六頁）。

(29) 『京都日出新聞』一九〇八年七月一〇日付。

(30) 『京都日出新聞』一九〇八年二月二日付。

(31) 『京都日出新聞』一九〇八年二月一四日付。

(32) 『大阪朝日新聞』一九〇八年二月二〇日付（前掲『京都の部落史』第七巻、一〇二頁）。

(33) 『大阪朝日新聞』京都付録、一九〇八年一月二〇日付。

(34) 『大阪朝日新聞』京都付録、一九〇八年一月二二日付。

(35) 『京都日出新聞』一九〇九年一月二三日付（前掲『京都の部落史』第七巻、一〇三頁）。

(36) 『大阪朝日新聞』一九〇九年二月二日付（前掲『京都の部落史』第七巻、四三四～四三五頁）。

(37) 『京都日出新聞』一九一〇年一月二四日付（前掲『京都の部落史』第七巻、一〇六頁）。この一周年記念会については、上田による田中村親友夜学校『日誌』にも記された。一九〇九年一月二二日条によると、会場については親友夜学校の生徒が準備を手伝った。

(38) 『大阪朝日新聞』一九一〇年二月五日付（前掲『京都の部落史』第七巻、一〇七頁）。

(39) 同右。

(40) 前掲田中村親友夜学校『日誌』には、親友夜学校の子どもが参加したことが散見される。

(41) 前掲田中村親友夜学校『日誌』、一九〇九年一月九日条。

(42) 前掲田中村親友夜学校『日誌』、一九〇九年二月九日条。

(43) 前掲田中村親友夜学校『日誌』、一九一〇年七月九日条。

(44) 前掲田中村親友夜学校『日誌』、一九一〇年一〇月六日条。

(45) 『京都史田中町親友夜学校並二町青年団沿革史』。なお『田中親友夜学校沿革史』では「青年団は何地も昔は若中と称して徳川時代より各町村に其れ／＼の集団を成して存在せしが、元より習慣的自然的に相寄する集団にて統制的団則会則等の制定なく、時代々々の権威者が行司となりて年中行事の采配を採り来れり。元より修養団体にあらず、産業団体にあらず、只盆、正月、祭礼等に於ける青年行事を司り来れり。女子青年は男子若中の付随集団の如く扱れる。全国的に青年は徳川時代より明治二十七、八年頃までは右様の集団なりしが日清戦争後、時代の進運に應じて統制的修養団体として組織さる、様になれり」（京都部落史研究所編『京都の部落史』第九巻〈史料補編〉、阿吡社、一九八七年、四九五頁）と一般的な青年団および青年会の歴史が記されたが、これは田中部落でも当てはまるものであったと思われる。

(46) 醇成青年会『醇成青年会日誌』。この日誌には表紙に、「明治四拾壹年以降」と記された。なおここで醇成青年会については注記のない限り、この日記からのものである。

(47) 『愛宕郡田中村醇厚青年会々則』（前掲『京都府田中村調査書類』）。

- (48) 前掲「京都史田中町親友夜学校並二同町青年団沿革史」。
- (49) このことについては前掲田中親友夜学校「日誌」にも記述されているが、三月二五日に自強会で決定されていた。
- (50) 京都府庁文書「町村引継書類・田中村」、一九一二年五月（前掲「京都の部落史」第七巻、一〇九―一一〇頁）。
- (51) 前掲田中親友夜学校「日誌」一九一二年七月一五日条。
- (52) 前掲「醇成青年会日誌」一九一二年五月一六日条。
- (53) 前掲「醇成青年会日誌」一九一二年九月二四日条。
- (54) 前掲「醇成青年会日誌」一九一二年九月二七日条。
- (55) 前掲「醇成青年会日誌」一九一三年一月一六日条。
- (56) この浅井の死による田中部落の混乱と危機については前掲白石「上田静一小論・親友夜学校と北海道移住」が論じているので、若干の新しい事実を加えて簡単に記すことにする。
- (57) 前掲田中親友夜学校「日誌」には、上田を中心とした講をめぐる動きが詳細に記されている。
- (58) 前掲田中親友夜学校「日誌」一九一三年八月三〇日条。
- (59) 前掲田中親友夜学校「日誌」一九一三年九月一日条。
- (60) 前掲「醇成青年会日誌」一九一四年一月二七日条。
- (61) 前掲田中親友夜学校「日誌」一九一四年一月二九・三〇日条。前掲「醇成青年会日誌」一九一四年一月二七日条には上田に宛てた請願書が記されている。
- (62) 前掲田中親友夜学校「日誌」一九一四年二月一二日条および前掲「醇成青年会日誌」一九一四年二月一二日条。この請願書は、前掲「京都府田中町改善二関スル書類」に綴られている。
- (63) 前掲田中親友夜学校「日誌」一九一四年三月一二日条。
- (64) 前掲「京都市田中町親友夜学校並二同町青年団沿革史」。
- (65) 上田が講の関係者である田中部落の有力者に親友夜学校の存続について相談していたが、早瀬などは必ずしも上田に好意的ではなかったことが、前掲田中親友夜学校「日誌」に出てくる。
- (66) 前掲「京都府田中町調査書類」。
- (67) 前掲「醇成青年会日誌」一九一四年四月二日条。
- (68) 前掲「醇成青年会日誌」一九一四年四月九日条。
- (69) 前掲「醇成青年会日誌」一九一四年七月二五日条。
- (70) 前掲田中親友夜学校「日誌」一九一三年一〇月一二日条。
- (71) 前掲田中親友夜学校「日誌」一九一三年一〇月一四―一六日条。
- (72) 前掲田中親友夜学校「日誌」一九一三年一〇月一七・一八日条。
- (73) 前掲田中親友夜学校「日誌」一九一三年一〇月一九日条。
- (74) 前掲「京都市田中町親友夜学校並二同町青年団沿革史」。
- (75) 帝國公道会全体については藤野豊「融和団体「帝國公道会」史論」(西播地域皮多村文書研究会編刊「復刻版・公道」別巻、一九八四年)、帝國公道会と京都との関係については前掲白石「明治末期における部落改善運動の二つの道」を参照されたい。
- (76) 前掲田中親友夜学校「日誌」一九一四年一〇月三日条および帝國公道会「会報」第三号、一九一五年一月、一四頁。
- (77) 前掲田中親友夜学校「日誌」一九一四年一〇月二三日条。
- (78) 前掲田中親友夜学校「日誌」一九一四年一〇月二六日条。
- (79) 前掲「京都府田中町改善二関スル書類」。
- (80) 前掲田中親友夜学校「日誌」一九一六年二月九日条。
- (81) 前掲「京都府田中町改善二関スル書類」。
- (82) 前掲田中親友夜学校「日誌」一九一六年二月一九日条。
- (83) この関西有志懇談会については、「明治之光」第五巻第四月号、一九一六年四月の「同志懇談会記事」(五六―五八頁)を基本とした。
- (84) この提案は、前掲田中親友夜学校「日誌」一九一六年三月五日条には出てこない。
- (85) 前掲白石「上田静一日誌」(「京都部落史研究所紀要」第三号、七二頁)。
- (86) 前掲「田中親友夜学校沿革史」(京都部落史研究所編「京都の部落史」第九巻〈史料補編〉、阿吡社、一九八七年、五〇九頁)。
- (87) 「公道」第三巻第三号、一九一六年三月、九頁。
- (88) 前掲「京都府田中町改善二関スル書類」。
- (89) 前掲「京都府田中町改善二関スル書類」には、醇成青年会と親友夜学校の帝國公道会通常会員証が貼り付けられている。
- (90) 前掲田中親友夜学校「日誌」には四月一八日から六月五日までの

記述は全くなく、また六日のみ記しているが翌日から七月二五日まで「日誌記入を欠く」とある。親友夜学校には関わりをもっていなかったと考えられるが、親友夜学校に対して関心が低下していたか、北海道移民について動いていたかであろう。

- (91) 前掲「京都府田中町改善二関スル書類」。このことは、前掲田中親友夜学校「日誌」一九一六年七月二五日条にも記された。なお「日誌」の七月の記述はこの日のみであり、八月は九日だけで、九月四日から再開され、最後の記述は二月一二日であった。

- (92) 田中部落の車夫については師岡祐行「絵馬と田中車連中」(『京都部落实研究所報』第七号、一九七八年七月)が一九一〇年一〇月に「田中車連中」が三宅八幡に絵馬を奉納したことを述べ、また長尾眞砂子「路面電車と車夫の抵抗―市電廃止によせて―」(『京都部落实研究所報』第八号、一九七八年八月)が電車の発達を契機とした京都の車夫の抵抗があったことを述べた。

- (93) 前掲「京都府田中町改善二関スル書類」。

- (94) 前掲「京都府田中町改善二関スル書類」。この諸願書は下書きであり、日付が書き入れられていない。

- (95) 『大阪毎日新聞』一九一五年一〇月二日付(前掲「京都の部落实」第七巻、三五二頁)。

- (96) 『大阪朝日新聞』一九一七年九月七日付(前掲「京都の部落实」第七巻、三五四―三五五頁)。

- (97) 前掲「京都の部落实」第七巻には人力車夫に関する史料も収録されているが、人力車夫の動向を追うことは京都市内における部落实の仕事や生活を説明するうえで重要な意味をもつものであるといえよう。

- (98) 上田による北海道移民に関する取り組みの詳細については、前掲白石「上田静一小論・親友夜学校と北海道移住」を参照されたい。

- (99) 拙稿「謝罪という差別事件の解決―一九二二年・京都駅差別事件の検討―」(『雑学』第二九号「下之庄歴史研究会」、二〇〇四年五月)。また拙稿「南王子水平社創立の歴史的意義―いかに部落青年は差別と向き合ったか―」(和泉市立人権文化センター編刊『南王子村の水平運動』、二〇〇三年三月)において南王子青年団を検討し、南王子水平社創立との関係を検討した。

- (100) 京都府庁文書「戸主会自治民育諸会一件」一九一九年二月(前掲「京都の部落实」第七巻、一四四頁)および『日出新聞』一九二〇年三月二六日付(前掲「京都の部落实」第七巻、一四四―一四五頁)。

- (101) 前掲朝田「新版・差別と闘いつづけて」では、寺田の京都府水平社委員長就任を「寺田は奈良の出身で、アホダラ経の流しをやっている、いつとはなしに田中に住みついたという男だったが、かれの人柄なら反対派の一部もついてくるだろうと、集会にも出ていないのに、たのんで引きうけてもらった」(二六頁)と説明されている。ここには寺田の思想と行動の特徴や水平運動と改善運動の関係などの説明はなく、ただ寺田の利用という側面しか記されていない。

- (102) 南について拙稿「創立期全国水平社と南梅吉(上)(中)(下)」「京都部落实研究所報」第一〇―一二号、一九九九年七・一〇月・二〇〇〇年一月)があるが、全国水平社創立以前の部落改善運動との関わりについては検討を欠いている。

(あさじ たけし・大阪人権博物館学芸員)